



JTSU-B  
申10号

## 申10号「2023年度夏季手当に関する申し入れ」

### 第4回交渉経て妥結！その②

- (会社) 本日の議題は申10号。現時点で妥結には至っていないので、本日継続での議論とさせていただいている。前回の会社回答を踏まえ、貴側より質疑応答があればお願いしたい。
- (組合) 前回の回答を受けた議論から、こちら整理していきたい。まずは1.8か月という数字の根拠。そしてコロナ禍突入の1.8か月とコロナ禍明けの1.8か月の基準を明確して欲しい。その基準がぼやけてしまっている。回答書にある「総合的に勘案し…」という文章があるが、どれがどう繋がっているのかわからない。あれだけ噛み合った交渉を続けてきた中で、このような回答が出ると会社と社員間に乖離が発生してしまう。根拠や整合性を見出し方についてお伺いしたい。
- (会社) まずこちらもお伺いしたいのだが、貴側はどのあたりの議論が噛み合ったと認識か？
- (組合) ゼロベースではないという議論からスタートし、賞与でありながら生活給である会社認識である所か。
- (会社) 確かにゼロベースでの議論では無くなった。しかし、決してここにプラスマイナスだけでの評価があるわけではない。それこそ回答にあるように総合的に勘案してという文章に含まれる。物価上昇や社会情勢、過去3年間の感謝と言ったことだ。プラスマイナスだけでは推し量れない要素である。経営だけで見ればマイナス要素しかなかった。
- (組合) ではこの3年間の不断の努力への感謝というのは今回の賞与の回答をもって終わりなのか。
- (会社) 決してそういう意味では無い。この先、このコロナ禍の影響が無くなればそうなるが、まだまだ不安要素はあるし、この先もあのような大変な中、従事してもらう事もあるかもしれない。
- (組合) 総合的に勘案し、という文章でひとくくりされてしまうとこちら要求の方法を考えなくてはならない。
- (会社) その内容を全て列挙すれば回答書にも書ききれない。物差しだけで簡単に測れるものではない。
- (組合) 賞与は業績連動給というが、業績連動がどの程度のウエイトを占めているのか。
- (会社) 業績連動給の名の通り、業績連動のウエイトは賞与の大半を占めている。ゼロベースの話になるが、去年の夏には赤字経営から脱却する光明が見えなかった。しかし今回はゼロベースではない。でもあの時は本当にゼロベースのスタートであったのは事実である。
- (組合) ゼロベースでの1.8という数字と、ゼロベースでなくても1.8。数字が同じでは腑に落ちないのが現実にある。ただ単純に0.2ずつ上げれば良い。どんぶり勘定。そういう風に見える。
- (会社) 去年の年末から比較している訳ではない。今回の夏季を昨年度の年末と比較するのはナンセンスである。
- (組合) 議論が噛み合った所についてお伝えしたい。まずはゼロベースではないという事。そして生活給の要素を考慮し、世間の動向物価高を加味した内容、そして出し渋りもしないといった会社姿勢であるところか。そういった認識を踏まえて今回出せる限界が1.8だったということか。
- (会社) そうだ。